

申請者	学科名	看護学科	職名	助教	氏名	石田実知子
調査研究課題	怒りに対するアンダーコーピングの発生メカニズムの実証的検討					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	石田実知子	看護学科・助教	精神看護学	調査・分析・論文作成	
	分担者	實金 栄	看護学科・准教授	老年看護学	論文作成	
		山口三重子	看護学科・教授	基礎看護学	論文作成	
調査研究実績の概要	<p>【背景】 近年、青少年の健康に関わる課題として、暴力、自傷行為などの自他への攻撃的行動が問題となっている。例えば、少年による薬物乱用、強盗、殺人事件等の凶悪犯罪が極めて重大な社会問題となっている。攻撃性とは、一般的に、怒りや敵意などの感情特性を指し、様々な形で思春期に顕在化しやすく、思春期精神科医療にとって重要なテーマの一つとなっており、暴力、自傷行為、薬物の乱用は関連性が高く、これらが自殺につながる頻度も高いことが報告されている。内閣府は自殺総合対策大綱に思春期の自殺予防対策として、青少年に生活上の困難・ストレスに直面したときの対処方法を身に付けさせるための教育を推進するよう重点施策として明記した。特に対人ストレスは、強いネガティブな影響力があり様々な精神病理に対して、その在り方を大きく左右すると言われている（Schaefer& Lazarus、1981）。しかし、これまでの実証的研究において高校生を対象とした怒りに対するアンダーコーピングの発生メカニズムの実証的検討は無く、国内外においても高校生の実態調査は数件しかなく、これらを明らかにすることは、今後のストレスマネジメント教育に繋がり、健康の保持増進への一助となると考える。</p> <p>【目的】 暴力行動の予防に資する基礎知識を得ることをねらいとして、高校生を対象に、精神的健康に対する高校生の対人ストレスと怒りに対する対処行動との関連を明らかにすることとした。</p> <p>【方法】 1. 調査対象：本研究では、調査協力が管理者から得られた〇県内高等学校に通学する2校の高校生847名を対象に調査を実施した。 2. 調査実施期間：平成28年5月下旬から6月初旬に教員の担当する教科あるいはホームルームの時間を利用して各クラスとも共通の教示文によって実施した。 3. 調査内容：調査内容は、基本属性（性別、年齢、学年）、ストレス認知（高校生対人ストレス：石田2015）、対処行動（高校生アンダーコーピング特性評価：石田2015）、精神的健康（WHO-5精神健康状態表簡易版：稲垣他2013）で構成した。 4. 統計解析：統計解析は、684データのうち有効回答票417データに対し、Lazarusらの心理的ストレス理論に基づき、学生生活関連ストレスが直接的に精神的健康度に影響すると同時に、コーピングを通して精神的健康に影響するとした媒介モデルを仮定し、そのモデルの適合性と変数間の関連性について構造方程式モデリングにより解析した。</p>					

調査研究実績
の概要

【結果】

1. 回答者の属性分布

1) 学科と課程および性別の内訳

性別の内訳は、男性251名（60.2%）、女性166名（39.8%）であった。

2) 学年と年齢の内訳

学年の内訳は、1年生138名（33.1%）、2年生155名（37.2%）、3年生124名（29.7%）であった。また、年齢は15歳124名（33.1%）、16歳158名（37.9%）、17歳116名（29.0%）、18歳8名（2.45%）であった。

2. 精神的健康に対する対人ストレスと怒りに対する対処行動の関連の因子構造モデルのデータへの適合性の検討

3つの尺度を用い、因果関係モデルを構築し、共分散構造分析を用いて仮定した因果モデルのデータへの適合度を確認したところCFI=0.941、RMSEA=0.046と、統計学的許容水準を満たしていた。したがって、因果関係モデルは、データに適合していることが認められた。変数間の関連性に注目すると、対人ストレスと精神的健康間に統計学的に正の関連が認められた。また、対人ストレスとコーピングおよび精神的健康間に統計学的に有意な正の関連性が認められた。コーピングの下位概念のうち状況分析の媒介効果は統計学的に支持されなかった、援護要請、逃避、暴力はその媒介効果が統計学的に支持された。このとき援護要請は精神的健康に対し有意な負の関連を、また逃避と暴力は正の関連を示していた。なお、本分析モデルにおける精神的健康に対する寄与率は49.9%であった。なお、パス係数はいずれも統計学的な水準を満たしていた。

【考察】

本研究の結果は、ストレスの認知的評価・対処行動・ストレス反応と同様の概念を包含した具体的な事象を取り上げており、ラザルスの認知的評価理論による因果関係が学問的に支持されたと推察される。また、統計解析の結果より、対人ストレスは精神的健康に影響していたが、怒りに対するコーピングのうち、援護要請は精神的健康を高める方向に、また暴力と逃避は精神的健康を悪化させる要因となっていることが示唆された。これは、ラザルスらがストレス認知理論の中でストレス状況への対処行動として「問題中心コーピング」と「情動中心コーピング」の概念を提起し、逃避などの消極的対処はストレス反応を促進し、反対に援助希求などの積極的対処はストレス反応を軽減するとされていることからラザルスの認知的評価理論による因果関係が学問的に支持された推察される。また、本分析モデルにおける精神的健康に対する寄与率は49.9%であったことから概ねリスク要因に理論的な根拠と予測を裏付けるのに十分な影響力の両方が備わっていたことから、因果関係が成立したといえる。今後、ピアサポーター育成に向けた取り組みやストレス認知と対処行動に着目した支援に関する包括的な教育プログラム開発が望まれる。